谷秦山縁の人々

浅見 絅斎（あさみ けいさい）(1652－1712)

近江の国生まれ。医者の職に就くが２８歳の時、京都で山﨑闇斎に師事する。佐藤直方、三宅尚斎とともに崎門三傑の一人と称される。性格は厳格で終生仕官せず門人の教育に努める。闇斎や秦山とは神道をめぐり、わかれることとなるが、闇斎の死後は神道を尊び香を焚いて謝り闇斎の説を継いだとされる。闇斎の教授法は厳しく、絅斎が吐血しても休息させてもらえなかったと伝わっています。

山崎 闇斎（やまさき あんさい）(1618－1682)

京都生まれ。両親は鍼灸師。若い頃は乱暴者で比叡山に修行に出されるが、勝手に山を下り、京都の妙心寺に入ります。そこで山内家の湘南和尚に師事し、彼とともに土佐の吸江寺に修行僧として来ます。ここで、南学を修めた谷時中を知り、野中兼山や小倉三省と交流し共に学びを深めます。その後、京都に戻り塾を開くと門人が6,000人にもおよび、京都へ参った谷秦山も山﨑闇斎の下で学びました。

野中 兼山（のなか けんざん）(1615－1663)

姫路生まれ。養父直継の逝去に伴い土佐藩執政として当時の藩主山内忠義に仕えました。土佐南学に裏打ちされた強い信念と先見の明で新田開発や港湾の整備などを実施し、土佐藩を発展させました。香美市では土佐山田の町づくりや山田堰の建設に取り組み、香長平野への水の安定供給に貢献したことで知られます。兼山逝去の年に秦山が生まれていますが、その教えは山﨑闇斎などから受け継がれ、秦山に多大な影響を与えたと考えられています。

渋川 春海（しぶかわ はるみ）(1639－1715)

京都生まれ。近世日本の天文暦学の開祖と称されます。秦山が１７歳で山﨑闇斎に入門した際、同門にこの渋川春海がいました。秦山は神道の学びを深めるためには天文暦学の研究は不可欠と考え、渋川春海に師事します。

渋川は朝鮮中国からの輸入であった暦を、中国と日本の経度差に基づき計算し、日本人による日本の暦を作成します。秦山は渋川に手紙を使った通信教育の形で学びました。

野中 婉（のなか えん）(1661－1726)

兼山の娘で、兼山が逝去後、お婉がまだ４歳のころ、無実の罪で野中一族は宿毛に幽閉されました。常に監視され、監獄のような場所での生活は４０年もの間続きました。秦山とはこの幽閉中に文通で知り合い、一説にはこの文通で医学・薬学の知識を習得したのではとも言われているようです。幽閉がとかれてからは、医業を生業にし、自身も貧しいながら、貧しい人々を無償で診療していたと言われています。

谷 垣守（たに かきもり）(1698－1752)

谷秦山の長男として高知城下の秦泉寺村に生まれ、秦山から儒学や神道を学びました。秦山が無実の罪で蟄居の処分を受けた後も、父秦山を心から敬服していました。秦山が逝去して７年後、他国遊学が認められ、全国の第一線で活躍する学者たちに師事し、儒学や神道を学びました。

この結果、秦山から受け継いできた土佐南学の礎（いしずえ）を固め、実子の真潮に受け継ぎ、土佐南学の大成に貢献したとされています。

谷秦山縁の土地

谷秦山墓所

香美市植地区前山のぐいみ谷（秦山公園北側）にある秦山の墓です。墓を立派にすることを控える、谷家の家訓にならい、自然川原石に『谷丹三郎重遠墓』とだけ刻まれた質素で小さなお墓です。写真のように立派なお墓になったのは、後世の秦山を慕う人々によって整備されたものです。秦山の熱心に勉学に励む姿勢が後世に伝わり、受験や就職の時期には国旗を手に祈願に訪れる人々が後を絶ちません。毎年２月の第三日曜日には谷秦山墓前祭が執り行われています。

野中神社（お婉堂）

谷秦山と交流のあった野中婉が兼山の旧臣の古槇氏の協力を得て建立しました。兼山や宿毛幽閉中に逝去した家族や忠臣の古槇次郎八を祭っています。土佐山田町中組にあるお婉堂は谷秦山墓所からすぐの場所に建立されています。

谷秦山邸跡

土佐山田町秦山町にあるこの石碑は秦山邸があったとされる場所で、ここで秦山は熱心に勉学に勤しみました。石碑には秦山の詠んだとされる詩が刻まれています。